

今更で恥ずかしいが、一本の木に雄花と雌花をつけるものと、雄の木と雌の木が別のものがあることは、銀杏のなるイチヨウとならないイチヨウがあるということ薄々知っていたが、実際この目で詳しく観察したのは初めてで新鮮だった。私について言えば、植物について知っていることはほんの一部で本質的には知らないことだらけだ。

フキのこともそうだった。春、雪解けとともに家先に顔を出すフキの臺は味噌で和えると酒が進むんだなど悦にいつていても、そのフキの臺にも雄と雌があるのは知らなかった。確かに花が開いていない食べ頃のフキの臺の雄雌を見分けることはできないかもしれないが、食べられるのを逃れたものを観察しているとそのうち違いが見えて来る。外側を覆っていたものが開くと中からぎつしり蕾がつまつた鞠のようなものが見えて来るがどれも同じに見える。その蕾が開き始めると白くパツと花が咲くのと、先が濃い紫がかつた色の花が密集した状態のときに見分けがつくようになる。白いのが雄。紫のが雌。白い雄花が満開になる頃、雌花の丈が高くなり始める。やがて雌花は茶色く小さくなるが、雌花はほとんど丈が高くなり、花の形も白い綿毛の状態になってくる。かなり高くなつたところで種のついた綿毛を飛ばし始めるのだ。そのうち雄花も雌花も姿を消し大きなフキの葉に覆われるようになる。家の周りには大きく3つのフキのコロニーがあるが、そのうちの一つについて雄花と雌花の数を数えてみたが、若干、雄花が多かつた。そもそも私たちが雄花と雌花のどっちを多くフキ味噌や天ぷらにしたかわからないので、雌雄ほぼ同数としておこう。

あれだけ再生を期待して池まで掘つたガマについても何も知らなかつた。ガマの再生を確認した最初の年は葉だけで穂は見ることができなかつた。ようやく穂らしきものを見ることができたのは三年後だった。それもちよつと太い茎程度のもので、良く見ると先の方が少し長く膨らんでいるように見えなくはない。一週間ほど経つと穂のようなものの先が割れて濃い緑色のものが現れてきた。てつきりこれがガマの穂になると思つていた。確かにそれから二日後には茶色い色に変わつてきたのだが、どうも形が溶けたソフトクリームのように、あの立派なフランクフルト型とは程遠かつた。まだ株が未熟なのかなとも思つたが、さらに十日待つと溶けたソフトクリームは小さくなりその下の部分が太くなつてきた。色も緑と茶の混ざつた状態になり、テクスチャもあのマットな感じになつてきた。上部は雄花で下が雌花と思われる。きつと、これが成長し上部は徐々に消滅しあの見慣れたガマの穂になるのだ。そしてあるとき穂の一部がほころびそこから白い綿毛が爆発するように出てきて、あとは風や水の流れに託すのだ。

こんな感じで、見慣れていると思つているものでも知らないことばかり。ましてや、今まで馴染みのなかつたその他の多くの樹木については一年が未知の世界といつても良い。いつたいいつ花が咲くのか、どこに実がなるのかなど図鑑を頼りにひたすら観るしかない。

